

綱光公記

— 宝徳二年四月～五月記 —

はじめに

『東京大学史料編纂所紀要』二〇号～二五号では広橋綱光（一四三一～七七）の文安三年（一四四六）から応仁元年（一四六七）までの暦記の翻刻を行った。その後、二六号より再び時代をさかのぼり日次記の紹介を行っている。今号では宝徳二年（一四五〇）四月～五月記を取り上げる。本記の概略については二〇号を参照して頂きたい。

この年の將軍は足利義政、天皇は後花園天皇である。綱光は二〇歳。官位は正五位上右兵衛佐で、三月二十九日に右少弁に任じられたばかりであったが、四月一七日左少弁に昇任した。これは左中弁万里小路冬房が右大弁に昇進したことに伴い、武者小路資世が弁官就任を望んだためである。資世は従四位下であったため、正五位上の綱光を超えての任官を求めた。これに綱光は反対し、結局綱光が左少弁に転じ、資世が右少弁となった。転任の日付はややさかのぼって、冬房の昇進と同日の一二日付けとされたようである。四月二十九日、綱光はさらに権右中弁に昇進する。これも資世の左少弁昇任希望によるものであった。

遠須田 桃
藤田 中崎
珠牧 奈有
紀子 保一郎

その他の主な内容を見る。綱光は藏人・弁官として後花園天皇の箏の灌頂伝受、止雨奉幣・賀茂祭・平野祭・任大臣などの差配を行っている。先述の昇進や、藏人・弁官としての仕事を遂行するにあたっては、前内大臣万里小路時房の助力を得ている様子も窺える。本記には時房からの書札も数通貼り継がれている（失われた書札もあるようである）。五月には、延暦寺根本中堂に勅作とされた薬師像を奉納する儀があった。元來、根本中堂に円珍作とされる三尺ほどの木造薬師像があり、その胎内に三寸ほどの金銅の七仏が収められていた。しかし永享七年（一四三五）根本中堂が自焼した折に焼失し、一仏のみ残っていたという（『康富記』）。この年、焼失した分を新たに作り、木造薬師像に天皇が刀を入れ勅作と擬された。この儀も綱光が差配した。また内裏では、しばしば蹴鞠が催されており、これにも参任している（四月二十七日条・五月一日条・四日条）。

綱光の私生活では、四月一六日に前年宝徳元年九月に産まれた子息（のちの兼顕）のお食い初めが行われた。五月末には体調を崩し、廬山寺僧による大般若経転読が行われている。

次に書誌情報についてまとめる。底本は国立歴史民俗博物館蔵『綱光

公記』(日六三一六六四)で、自筆本である。本記は反故紙を翻して記されている。題箋には「綱光公記(自宝徳二年四月十五日至六月廿九日、首尾闕(四十五頁、五廿三条、六廿九尾欠)) 自筆本 一卷 『綴合改めたる通り』とある。題箋の通り四月一六日条の前の日条の前半まで、また五月二三日条の途中が欠けている。

末尾になるが調査・翻刻を御許可下さった国立歴史民俗博物館に深謝申し上げます。

【付記】本稿はJSPS科研費J P 1 6 K 1 6 9 0 1、J P 1 6 K 1 6 9 1 1の助成を受けたものである。

【凡例】

- ・翻刻に当たっては、文書の貼り継ぎがなされていたり、異筆の場合は、「」で括って示した。
- ・文字はおおむね現時通用の字体に改め、改行は原則として追い込みとした。傍書・挿入箇所も適宜本文中に追い込みとした。
- ・本文には読点および並列点を加えた。尊敬を表す關字は適宜存した。
- ・欠損の箇所はおよその字数を計って□または□で示した。抹消された文字は左傍に、を付し、判読不能の塗抹文字は、およその字数を計って■または■とした。判読不能の文字は☒で示した。また残画により文字が推定できる場合は、その文字を□の中に示した。
- ・本文中で校訂により改められるべき文字や加えられるべき文字は(「」)、人名注など参考のためのものは(「」)に入れ傍に記した。なお人名注は現在通用する家名および名を用い、各月の初出時に示した(例えば室町殿は足利三春あるいは義成でなく義政とした)。入道した者については、まず法名を示し、続いて俗名を示した。
- ・その他、適宜○を付して注記を示した。

(貼紙、別筆) 一 宝徳二年四月

於朝餉御琴御催頂事(遣)
引被殿(武者小路)
弁官御転任(左中弁) 資世朝臣与相論之事

(前欠、四月)

盆一枚

第 三

盆一枚

籠

第 四

金網(綱邊)
地(綱邊)

盆一枚

第 五

御絵(三幅)

盆一枚

十六日、晴、賀茂祭申沙汰之外無他事、今日小生飯初如形致其沙汰、春日社神供・禁裏御膳(広橋綱子)典侍殿送給、慈母等御出、表万代之儀珍重々々、(豊子女王)

一 (貼紙)

御料人様為御食初神供の事被仰出候、御目出候、則神供二前朔夕(朝)

進□千秋万代御所願成就□満御目出候、同御極一荷二種進上候、

御祝着計候、将又御幣料五十疋被送下候、珍重候、御目出候、於御

祈禱□長日更々□×儀殊祈念申入之由可有御披露候、恐々謹言、

卯月十六日 (草名) 上、

速水掃部助殿」

十七日、晴、今日予弁官転左之由被仰下、祝着無極、此事有種々御沙汰

也、(方里小路冬房)資世朝臣弁官事望申候云々、仍□階上首間、左少弁可往任之由

予申云、資世朝臣四品事申之時、頭弁・予趣上首四品者、定弁官

就上首可往任歟、然者夕郎勞無念之由申入了、仍御聞道処、然者不可申

弁官望之由就申入、四品御免候き、今日又弁官事申入条、先度申詞相違

候、以外次第候、其上四品少弁例繁多候、右少弁例建久十年右少弁範光（藤原）于時從候、已以先例□上者、予綱光（藤原）左、資世朝臣任右少弁奈勿論候歟（不可有）、
四位下候、由申入了、仍勅答尤之由被仰、予軼左了、如此資世朝臣申所存云々、

抑四品人往任事勿論事也、雖然今度儀以前就申詞、予申所存軼左了、能々可知尋事也、入夜參内、今日琴可有御催頂也、洞院内府可參云々、朝餉間可出御可檢知之由被仰下、奉仰六位藏人（通）道任仰々旨致沙汰、朝餉間南面敷御茵、切灯台有南（方）鬼關（方）閤戸、御琴二張台繫所北東上立之、頃之内府參、予□具之由仰申入、則主上御引□出御、予南広縁御簾外伺御氣色、可召之由 勅答奉後、内府仰勅答之趣、則内府朝餉間南自御簾參、

内侍持參御琴、主上令取給、次内侍今一張琴被軼内府、々々令取之、無程事終内侍■如元參給御琴立本所如初、次主上入御、次内府退、内々於宜定所御對面、内府衣冠下結、今日直衣始云々、事儀珍重々々、

十八日、晴、參室町殿、依召也、被仰下云、賀茂祭藏人使事、如元可沙汰進員弘之由可申入旨被仰下、入夜向上臈局、藤中納言等有盃酒、以外沈醉間無程帰宅、

十九日、晴、參禁裏、昨日御執奏之趣申入了、取進申状、則無左右勅許御心之由可申入旨被仰下、則參室町殿、勅答之趣申入了、次弁官轉任申入御礼、御太刀進上、祝着無極、一昨日御沙汰、昨日例日間今日所申入也、

廿日、
廿一日、晴、賀茂祭申沙汰外無他事、出車闕如、珍事、末代為之如何、

廿二日 入夜參内、依祭警固也、上卿新中納言（柳原）資綱卿、六府將監橋通任、官・外記遲參間所催促也、新中納言今夜奏慶云々、仍藏人方吉書可存知由、兼日内々示度間、仰出納所懷中也、頃之新中納言參、如木雜色一人、小雜色四本敷、諸大夫一人也、申次橋通任、奏了着殿上事如例、于時小

雨□則着陣、予着軼、下吉書、上卿覽之後召留予下吉書、予於軼覽之如恒、次予取吉書左廻於床子前壇上、（持物取）目史、々来予前、予下吉書史覽之時申マ、二、史称唯、予退、則上卿着陣、次上卿召官人（奥座）、召予、々於出陣、（上座下）上卿仰云、奏賀茂祭警固之由、予經本路退、付内侍奏聞、（但由）予則帰出仰聞食之由、上卿微唯、予退、次上卿起□着端座、次召官人數軼、次又召官□召外記、々々參軼、召諸衛敷、次橋通任答揖、上卿仰詞如例、次橋通任帰出、（帶弓）答揖、次上卿退出如例、上卿則參向日吉祭云々、予則退出、于時曉鐘程也、

廿二日、晴、今日平野祭也、依例仰当日等事所申沙汰也、上卿中御門中納言、弁親長朝臣分配也、出車基有朝臣称不具沙汰進、以外事也、仍不參、不可然事也、兼任朝臣被付千足訪、是平野社務沙汰之、平野社務依服中不參間、氏人及闕如、兼任朝臣一人勤、每度神事計會間、不被下御訪者、不可随神事之由就申入、自武家仰平野神主沙汰定兼任朝臣云々、先無為也、々々珍重也、依此事延引了、所今日所被行也、入夜參内、臨時祭御禮依申沙汰也、使侍從雅保參仕、頭弁參、事儀如例、六位藏人橋通任祇候、内豎遲參、■但旁兼者敷、仍及曉鐘了、宣命内々自台繫所内侍被出使、雅保取宣命參向本社、予退出、本儀上卿於殿上可下使也、近代無沙汰敷、兼任朝臣治部卿并昇殿事御免所申沙汰也、兼被經御沙汰被申談執柄云々、

廿三日、晴、午一点參内、着束帶、色目如例、（着半）具小雜色二人・笠持一人、依賀茂祭申沙汰也、出納・小舍人雖一人不見、加催促、六位又雖一人不參、以外事也、及申刻頭弁・六位藏人三人參、出納・小舍人等祇候、近衛使・典侍等加催促、清凉殿端御簾悉垂之、同御座一帖敷階間、西階發妻戸長橋代南妻敷円座一枚為座、使台繫所前也、頃之中御門大納言、典侍出立、送侍者云納言車々副一人有云々如何様次第哉由申度間、納言車副三条中納言可沙汰立候、■失念候敷、忿被相儲、又可加催

廿二日、晴、今日平野祭也、依例仰当日等事所申沙汰也、上卿中御門中納言、弁親長朝臣分配也、出車基有朝臣称不具沙汰進、以外事也、仍不參、不可然事也、兼任朝臣被付千足訪、是平野社務沙汰之、平野社務依服中不參間、氏人及闕如、兼任朝臣一人勤、每度神事計會間、不被下御訪者、不可随神事之由就申入、自武家仰平野神主沙汰定兼任朝臣云々、先無為也、々々珍重也、依此事延引了、所今日所被行也、入夜參内、臨時祭御禮依申沙汰也、使侍從雅保參仕、頭弁參、事儀如例、六位藏人橋通任祇候、内豎遲參、■但旁兼者敷、仍及曉鐘了、宣命内々自台繫所内侍被出使、雅保取宣命參向本社、予退出、本儀上卿於殿上可下使也、近代無沙汰敷、兼任朝臣治部卿并昇殿事御免所申沙汰也、兼被經御沙汰被申談執柄云々、

廿三日、晴、午一点參内、着束帶、色目如例、（着半）具小雜色二人・笠持一人、依賀茂祭申沙汰也、出納・小舍人雖一人不見、加催促、六位又雖一人不參、以外事也、及申刻頭弁・六位藏人三人參、出納・小舍人等祇候、近衛使・典侍等加催促、清凉殿端御簾悉垂之、同御座一帖敷階間、西階發妻戸長橋代南妻敷円座一枚為座、使台繫所前也、頃之中御門大納言、典侍出立、送侍者云納言車々副一人有云々如何様次第哉由申度間、納言車副三条中納言可沙汰立候、■失念候敷、忿被相儲、又可加催

廿二日、晴、今日平野祭也、依例仰当日等事所申沙汰也、上卿中御門中納言、弁親長朝臣分配也、出車基有朝臣称不具沙汰進、以外事也、仍不參、不可然事也、兼任朝臣被付千足訪、是平野社務沙汰之、平野社務依服中不參間、氏人及闕如、兼任朝臣一人勤、每度神事計會間、不被下御訪者、不可随神事之由就申入、自武家仰平野神主沙汰定兼任朝臣云々、先無為也、々々珍重也、依此事延引了、所今日所被行也、入夜參内、臨時祭御禮依申沙汰也、使侍從雅保參仕、頭弁參、事儀如例、六位藏人橋通任祇候、内豎遲參、■但旁兼者敷、仍及曉鐘了、宣命内々自台繫所内侍被出使、雅保取宣命參向本社、予退出、本儀上卿於殿上可下使也、近代無沙汰敷、兼任朝臣治部卿并昇殿事御免所申沙汰也、兼被經御沙汰被申談執柄云々、

廿三日、晴、午一点參内、着束帶、色目如例、（着半）具小雜色二人・笠持一人、依賀茂祭申沙汰也、出納・小舍人雖一人不見、加催促、六位又雖一人不參、以外事也、及申刻頭弁・六位藏人三人參、出納・小舍人等祇候、近衛使・典侍等加催促、清凉殿端御簾悉垂之、同御座一帖敷階間、西階發妻戸長橋代南妻敷円座一枚為座、使台繫所前也、頃之中御門大納言、典侍出立、送侍者云納言車々副一人有云々如何様次第哉由申度間、納言車副三条中納言可沙汰立候、■失念候敷、忿被相儲、又可加催

廿二日、晴、今日平野祭也、依例仰当日等事所申沙汰也、上卿中御門中納言、弁親長朝臣分配也、出車基有朝臣称不具沙汰進、以外事也、仍不參、不可然事也、兼任朝臣被付千足訪、是平野社務沙汰之、平野社務依服中不參間、氏人及闕如、兼任朝臣一人勤、每度神事計會間、不被下御訪者、不可随神事之由就申入、自武家仰平野神主沙汰定兼任朝臣云々、先無為也、々々珍重也、依此事延引了、所今日所被行也、入夜參内、臨時祭御禮依申沙汰也、使侍從雅保參仕、頭弁參、事儀如例、六位藏人橋通任祇候、内豎遲參、■但旁兼者敷、仍及曉鐘了、宣命内々自台繫所内侍被出使、雅保取宣命參向本社、予退出、本儀上卿於殿上可下使也、近代無沙汰敷、兼任朝臣治部卿并昇殿事御免所申沙汰也、兼被經御沙汰被申談執柄云々、

廿三日、晴、午一点參内、着束帶、色目如例、（着半）具小雜色二人・笠持一人、依賀茂祭申沙汰也、出納・小舍人雖一人不見、加催促、六位又雖一人不參、以外事也、及申刻頭弁・六位藏人三人參、出納・小舍人等祇候、近衛使・典侍等加催促、清凉殿端御簾悉垂之、同御座一帖敷階間、西階發妻戸長橋代南妻敷円座一枚為座、使台繫所前也、頃之中御門大納言、典侍出立、送侍者云納言車々副一人有云々如何様次第哉由申度間、納言車副三条中納言可沙汰立候、■失念候敷、忿被相儲、又可加催

促之由返答、則三条中納言遣■青侍、仰遣此由、(正親町三条実雅・公綱)兩人參、室町殿可如何哉

返答云々、青侍答云、已及闕如、納言車副二人勿論候、定御失念候敷間、今一人忿雖留守可沙汰進之由、青侍聞道間則沙汰進云々、以外事也、頃之近衛使參、(于時申)使立無名門前、極臈源政仲出逢、則清凉殿出

御内々御覽、予持笏自無名門出逢召之、使答揖、予左廻、使參長橋代着座、(長橋代、自南階昇、東面着座、勸盃)■弁藏人權佐、(勸盃、帶)瓶子六位藏人、次予取祿給使、○々取之、起座、於庭上舞蹈、(尤頭弁可然事也、難波問予給之)次府者廻雪等如例、飭馬御覽又

如例、次出御長橋局、有北陣御覽儀、頭弁并予、權佐等有門下停立、程久間、(白地立床、六位同之、近衛使御覽後典侍以下命婦等參、給祿等条如例、子懸腰、(後花園天皇母、庭田幸子))抑此兩年依敷政門院御事無御覽之儀、当年有御覽当申沙汰所自愛也、每事無為珍重々々、於長橋局有天酌、中御門大納言、菅宰相、冷泉宰相、

右大弁宰相以下濟々祇候、入夜退出、猶々無一事違乱、添自愛氣味也、出車二両方々取集沙汰進、末代之儀珍事々々、委細納公事奉行箱、

廿四日、晴、解陣、上卿四条大納言、兼日領狀、六府右兵衛權佐、(經茂)一人參、藏人方兼帶間、当日之事与奪了、定如例敷、散状内々進入了、今夜撰津申送云、(滿穂)上様御腰立給云々、尤以珍重々々、

廿五日、小雨下、參上様御參籠所、申入珍重之由後退出、廿六日、

廿七日、晴、參上様御參籠所、(藏殿五大堂)是御蒙氣又興盛云々、乍驚馳參了、但今少御城敷、珍重々々、入夕參、禁裏、有御鞠、帥大納言以下、以上九人祇候、予依仰立懸、夏久県主祇候、

廿八日、晴、今日可有御入■(室)梶井宮、(近衛教基男、子ノ政深)若君当年始渡御庁宿所、(義孝)准后同令入給、(足利義教ノ名)南御所同渡御、御庵為御共、若君上臈以下四五人為御共、(西)出車、若君御狩衣、(白ラウ、御文御前等、青コタチ)予為役奏、昨日自、室町殿可參之由被仰下間、殊所早參也、(可為直垂之、由被仰下、)為先有式三獻、片口御銚子、以上予役奏、(送)南御所

御前、御庵陪膳給、後々女房達陪膳給間、予不及役奏、(送)准后式三獻以後令帰給、種々御計及大飯、入夜還御、予同退出、(顯言)山科參、有廻雪等、不無其興、小袖被下之、予遣直垂上如例、今夜之儀、被表万代嘉例者也、幸甚々々、

廿九日、雨下、為当番參、内、予弁官転任事御沙汰、所自愛也、資世朝臣及雖、宣下以後、猶申所存き以外次第、絶常篇者乎、所詮綱光転任

■事理運、不能左右之由被仰下、勿論々々、万里少路前内府被加芳言云々、為悅無極、抑五位人、(左少弁、右少弁)相並時、五位左少転権右中弁例繁多也、官勘進之、(勸修寺)聊勿論々々事也、申沙汰藏人佐、(經茂)也、

右中弁藤原教秀、(從四位上也、本權右中弁)權右中弁同綱光、(正五位上也、本左少弁)左少弁同資世、(從四位下也、本右少弁)右少弁同高清、(滿住也、正五位下也)

如此被染宸筆了、為祝着、口、宣案内々仰奉行書送、(珍重々々、)到来了任大臣有御沙汰、予申沙汰、但及暁更延引由被仰下了、是何事哉、

五月 一日、晴、早旦、參、(足利義政)室町殿如例、転任為御礼御太刀進上、(勸修寺教秀)右中丞同之、珍重々々、人々被賀、自愛々々、次向日野亭帰宅、賀酒之後、參嵯峨御參籠所、被下御盃、祝着無極、人々參集、抑予転任事、万里少路前内府賀礼到来了、所加統也、(オノ見)

夕陽之時分、自、禁裏有召間、以次所転任之慶申拝賀也、青侍并如木雜色略之、以略儀為先、且先公御例也、只小雜色三四計也、不及申次、近代此分敷、官、藏人方吉書所奏聞也、猶々■官藏人■(雖早速)之有御

鞠、抑五月申慶之事、於転任何有子細哉由、万里少路前内府示度故也加統、(任教命所加統石也、)

了抑予転任去十二日兩日間云々所存十七日也左少儘可存知也

二日、晴、自義孝梶井殿先日為御礼、練貫一重・一腰送給也、自愛無極、則序宿所へ遣侍者了、上様御欲楽又再興云々、驚存也、

三日、晴、上様御欲楽如何様、為有御座哉尋申、早旦參嵯峨、自今朝取御直云々、珍重々々、

四日、晴、為当番參内、及夕雨下、雖為雨中有御鞠、參仕之人々、三正条中納言・顯言朝臣・親長朝臣・教秀朝臣・有通朝臣・公澄朝臣・予・源政仲、事終退出所帰參也、内々也、

五日、雨下、早旦參室町殿如例、祝着、幸甚々々、夕陽之程、參内、被下天酌後退出、御月次御短尺所被下也、条々被仰下事有之、

六日、雨下、日野右大丞勝光入來閑談、有來樂飲頃之帰華、參室町殿云々、基有朝臣被補貫首、予宣下、仰極五辻政仲騰了、五月之例繁多也、内々被尋仰下間、少々注進入了、

七日、

八日、雨下、參内、依当番也、有御談議、清忠毛詩清少納言朝臣談之、有通朝臣・予兩人祇候、又被仰下云、明日猶降雨者、可被行止雨奉幣、可申沙汰由被仰下、畏承由申入畢、上卿日野中納言、弁予、可兼對云々、

入夜深雨令此分勿論々々是御執奏云々、親通

九日、雨下、止雨奉幣申沙汰、上卿以下遣一通了、自中山中納言有奉書、止雨奉幣可申沙汰由也、此事夜前已被仰下間、今朝上卿以下相觸了、所詮早可令申沙汰由出請文、抑自昨日禁中御修法砌也、神事発遣事雖存例、相尋兩局処、先例少々注進、重可注付大略不及宣命清書奏云々、爰永万元

山槐云、有止雨奉幣事、新中納言奉給也勘日時、奏宣命草後、不奏清

藤原実国行也、

書、於西陣座被発遣、陣中依御修法也、案之此例大内議敷里内無便宜所、仍殿上陣座等、阿闍梨為体所間、尤不可然事敷、永万等旧例、今皇居可相違事也、此外、永久三五廿一最膳講始也、又被行軒廊御下、康和四五

卅同講始、今日諸卿着仗座、伊勢大神宮心柱紛失事、久安三七六仁王侍之会待僧參之間、猶議奏祇園奉幣日時、此等例子存知了、或抄云、近代皇居無便宜所間、祈雨止雨并諸社遷宮日時定、猶於左仗座行之、於伊勢幣

尚可議敷云々、如御所為ハ不可有難候哉、猶少々存例、所詮執柄申談被計申處、有例上者不可苦、但於宣命清書者、如先例不可、奏聞条可然之由、

御被申者也、仍具披露也、此趣可然由被思食、之由仰下次雖快晴、可被御執奏行御執奏被行云々、条々蒙仰退出、秉燭以前着束帶參内、小雜色二三

本計也、頃之左右馬神馬、御幣以下諸司悉參集、仍宣命到來哉相尋運々處未到來云々依使々交名未到故云々遲々及權中納言アキマ及ルカ深更為之如何、

然而少内記草進之例有之、御事闕可草進之由申入、神妙々々、但無程到來、遲々以外次第也、近代内記不參、職事内々付度或付遣少内記、爰内記宿所程遠間、每度及違乱、珍事々々、則上卿日野中納言御執奏參陣、

弁予兼對六位外記清原康頼兼少内記、先上卿着陣、與上卿座下、タテヲ有奉申日時申上卿稱唯、次上卿着外座、召官人令敷賦、次上卿召弁、予參賦、

上卿仰詞如職事、予左廻、持笏、床子座前召史仰々詞、如上卿、史稱唯、則日時勘文持來予前、予取副笏下上卿、便宜所笏於給權儀次上卿召外記蓋敷、

次召弁日時勘奏聞、左廻之時、上卿仰云、令内覽則付内侍奏聞、返下上卿、予仰云、依勅予左廻、次召外記下勘文、次召少内記仰宣命事敷、次可有差文之處、近代無進覽由、外記申之間、無左右、予覽神祇官清奏、則返下

予、々結申退、左予於床子前乍立下外記、取副笏依史不參也、次内記持

參 宣命、上卿起座、宜陽殿西軒下内記相隨、奏覽 宣命草、則被返下、御覽シツ、予左廻、上卿歸着陣、見 宣命清書、則召外記仰使々分給由歟、

上卿撤軾退出、抑今夜不奏 宣命清書、依陣中御修法也、委細納公事奉行、于時月出雲間、風声散蒙雨、尤珍重々々、入夜又雨下、

十日、晴、今日為祈禱有百万反念仏、七難即域、七福即生、天下泰平、家門繁榮、每々可成就為令、男女一日勤之、尤以珍重々々、

十一日、晴、向左中弁親長朝臣宿所、是月次歌・鞠會云々、終日事也、人々群集、不有無其興、入夜歸宅、

十二日、晴、御月忌也、例供養僧不來臨、有少所用事歟、仍賞他僧了依賞畢、當番參 内、先向毘沙門堂、是有被仰下旨、

十三日、晴、向日野亭、為賀一級也、此外種々雜談等有之、十四日、晴、今日可有任大臣 宣下、可申沙汰之由被仰下、畏承之由申

入了、上卿三条中納言、公綱卿、極臈・官・外記遣一通了、是按察使公保卿任内大臣事也、入夜月明、參 内、諸司等催具、上卿參陣、與 予於座

下仰云、奧陸按察使藤原朝臣可任内大臣、上卿稱唯、予退、上卿着外座、召官人、二声、敷軾、次召官人、召外記、仰詞如職事歟、外記大外記清原

宗賢參軾、稱唯、上卿撤軾、退出、上卿則堂上祝着之由申入了、予又賀之、抑仰詞事、今夜清少納言内々祇候間、相談処、奧陸之字可仰事可然、

予存知按察使藤原朝臣可任内大臣と歟誠奧陸之定可然之由返答了、此事万前内府兼日相論了返報如此、文安二年度万里少路前内府任槐申沙汰日

野中納言資綱也、仍御沙汰之様内々尋遣処、有 宣命云々、元応以来無宣命、文安二年度有之由示度候条不審、權大外記・内府等尋之処、

之由示存了資登、無之云々、寿永比有 宣命云々、卒爾覺語比興々々、抑公保公任槐事如法過分事歟、父不拜任大臣、祖父マ正流、以例申任云々、尤無謂事也、莫

言々々、内府辭退去七日云々、辭退并拜任五月之例二年度歟、邇后事也、洞院、實照

貼紙紙
一万里少路前内府端裏書

内府辭退何日候哉、西園極叙又如何、西園寺公名

今夜任大臣 宣下事、臨期申御沙汰誠察申候、文安二年十二月廿九日儀尋承候、奉行職事右中弁資重仰上卿柳原權大納言兼柳原權大納言藤

原朝臣可任内大臣、次上卿召外記、權少外記中原家久參進、上卿仰々詞、如職事、無 宣命云々、先例 宣下之時寿永度有 宣命、元応以

來 宣下之時、無 宣命候歟、今夜仰詞事、按察使藤原朝臣可任内大臣、可如此歟、文安二年為第一大納言之間無片字候、今為按察使、

又不可及文字候歟之由、思給候、無混乱之儀之時、不仰文字、也先例候也、謹言、是

五月十四日 万里小路時房
切封墨引 (花押)

貼紙紙
一權大外記康富折裏銘 中原

文安二年十二月廿九日追讎之次、有任大臣宣下、万里少路大納言上卿權中納言清房卿、職事右中弁資重參陣、上卿召六位外記家久、被宣

下、局務不參、追成進 宣旨云々、御郷朝臣、宣命事無所見候、正親町三条

後聞、公保公実父公豊公也云々、然而侍從大納言、三條西實清、早世間相統云々、爰心底微而奉公不經常、公豊公為実父間御沙汰云々、乍

過分相当々時之作法者、又不無謂哉、莫言々々、今日地震、十五日、

十六日、晴、午刻時分着束帶參 内、延曆寺根本中堂薬師像可被擬 勅

作依申沙汰也、兼日々々被経御沙汰了、先六位一人（橋以量）木像葉師（立像）

入帳給、（未本地）宜定所御座前奉面奉置、次服進金銅七体葉師同入帳、北

勅作（御座也）左方（東）奉置此内、先年中堂炎上之時（永享七年）一体法華堂小物持来奉入、則

火、不知行方見失云々、希代事也、仍此一体相加七（共）仏新造之、又柳蓋筥

置小刀（ニシキニテ）ツカラマク、御鏡形、仏舍利、以上三色入蓋置右方、是 勅作像服

進物也、此外又金銅七体同入二帳御座外記右方奉置、為観覧也、次垂端

御（廉）篇出御、頃之 勅作事終而女房達、次内府以下頂戴之後、仰六位

仏等奉出、次可有 観覧仙洞可進召進之由被仰下、仰出世、（公承）六位二

人參候、抑兼日両局先例等相尋処、更無例云々、仍執柄有勅問処、云御

敬神、又自山門取申事候間、旁（可）以所然之由被申候間、今日以吉日有擬

勅作事兼又六位一人以外遲參間、出世（候）知名、不・六位一人兩人出御以前奉

置了、遲參何事哉、出御時分參祇了、極臈不參、及晚又大和唐嶺阿弥陀

三尊、一向木地上（ラニシキニ）依被擬 勅作也、被申執柄取云々、重畳 勅作

珍重々々、今度之儀一向毘沙門堂座主僧正申沙汰也、早旦 勅作秘事等

注一紙座主進入了、不可他見事也云々、予可申沙汰之由被仰下問存知了、

邂逅之儀幸甚々々、相当申沙汰、所自愛也、今日參仕之

時房公、内府公保公、

万里少路前内府 中御門大納言（宗頼卿、宗頼卿、宗頼卿）

菅宰相（東坊越、益長卿） 左大弁宰相（万里小路、冬房朝臣）

顯言朝臣 親長朝臣（左中弁）

季春朝臣（四辻） 有道朝臣（土御門有通）

予等也、

入夕有御鞠、内々也、予依仰祇候、依当番、帰參、

明日（十六日）、根本中堂仏像可被擬（擬） 勅作之由、被仰出候、殊以珍重候、

山門眉目不可過之候、繪旨事、雖何時候可下給候、時刻事、明日午
刻時分可奉入御本尊候、其時分可遂、人々御粉骨察申候、心事又可
申承候、恐々謹言、

五月十五日 公承

（切封墨引）

御不審条々一紙注進候、可有御披露候、今日儀珍重候、恐々謹言、

五月十六日 公承

中堂御本尊 勅作儀、無為無事、為天下珍重候、就其可被下 勅筆

之由、一紙注進仕候、同相添御料紙候、被下 勅筆之樣預御披露候

者、殊以目出候、尚々今日之儀無為申御沙汰之儀、難申尽候、心事

期面謁候、恐々謹言、

十一月十六日 公承

廣橋殿（綱光）

廣橋殿（綱光）

（切封墨引）

公承

廣橋殿 公承

十七日、晴、夕陽程降雨、無程晴天、高野將監依天下病死去云々、不便

無極者也、

一（綱光筆）仏像奉入 勅筆被書出間、座主遣了、代目秘事文云々、

昨日之儀、誠以邂逅之御願申御沙汰、當時珍重存候、旁可參申候、

勅筆一卷慥給候了、忝畏存候、可然之樣可有御披露候、將又院芸被

行勸賞候、面目之至候、口 宣案早々可被下候、注交名進候、条々

申御沙汰難申尽候、尚々可參申候、恐々謹言、

五月十七日 公承^{〔公承〕}

十八日、晴、自毘沙門堂僧正送侍者云、明日 勅作仏像可登山綸旨可書給云々、兼申入了、次仏師院芸依此賞叙法眼事、一昨日勅作則給口 宣案了、法印まで転叙云々、綸旨之様、

延曆寺根本中堂葉師像、所被擬 勅作也、宜奉祈皇土泰平宝祚安久者、天氣如此、仍上啓如件、

五月十六日 權右中弁綱光

謹上 座主僧正御房

則仏張奉入云々、眉目之至也、又送侍者者、此綸旨被擬勅作也、此像来月二日三日比可申登山、今申綸旨者、金銅七仏像為 勅願被寄附由之綸旨也云々、則披露処、可書給之由、被仰候間、文章万里少路前内府相談、又書賜了勅作之綸旨とても可申、来月間座主坊相留云々、二道同日、去十六日也、其様、

延曆寺根本中堂金銅七仏像、為 勅願、所被寄附也、宜奉祈天下泰平慶祚安永者、

天氣如此、仍上啓如件、

五月十六日 權右中弁綱光

謹上 座主僧正御房

抑今日南都勝願院僧正、為興福寺別當御礼上洛、此宿所来臨、楯等濟々送給、所祝着也、太刀一腰・十帖遣之、此僧正、去年歟、祖父可為御猶子之由、自故慈恩院僧正奉行之間存其旨間、無何近年如此申者也、所自愛也、權別當喜多院也正也、良雅旅宿越中入道宿者也

十九日、晴、曙氣甚、勝願院下向也、抑世間病、此間絶常篇興盛間、為祈禱又百万反念仏奉唱者也、尤以貴事也、

廿日、

廿一日、

廿二日、

廿三日、晴、暑氣甚、辰刻許、詣慧聖院、是明日故慧聖院七年正忌間、今日華界院被入来可聴聞之由承之間、殊微明所參也、慈母・西殿等御出、長老まで十一人^{〔一〕}

被供養致、明日被奉訪種々勤行、別時等尤神妙御沙汰、又三界万靈晴蒙浮雪生紫雲色生西方極樂、是念仏、心力勿論々々、可貴々々、次參詣瑞雲院、自是參行願寺、是開戸故、卅三年度開戸御座也、種々致祈念了、成就勿論々々、直帰宅、抑御経代百足持參了、人々心口可悲當時依計略也

廿四日、晴、今日故慧聖院光庵七年正忌、僧一人如形供養、

廿五日、晴、予歛樂、為之如何、自昨夕興盛、但不可苦云々、虫所勞云々、西園寺前内府極位事、去月廿五日仰下、申入此間連日就予申き、然而

前内府今度依御琴師賞一品御望有之則無左右雖上首不可有御沙汰之由、申入云々、尤無謂事歟、永亨二年度実量卿、依家賞、起実熙卿叙従二位、

同四年実熙卿賜去永亨二年同日位記了、近例先予存了、所詮西園寺前内府勸先例進上間、予則進御所候了、雖然、無左右無御沙汰処、為御執奏御沙汰云々、予 宣下了、中山中納言奉書到来了、彼先例続加者也、

西園寺前内府一品事、就申入勸進之、

依賞叙位時、上首賜同日位記例、

寛和二年十一月十日、參議伊陟卿依悠紀国司叙正二位、上首參議齊光卿同日叙同階、

長保三年十月十日、參議俊賢卿・行成卿等、依東三条院司、御賀次、叙従三位、上首參議忠輔卿賜同日位記、

同五年十一月五日、參議忠輔卿・行成卿等、依造宮行事、叙正三位、

上藤參議(菅原)輔正卿賜同日位記、

永享二年正月六日、実量卿依家賞起(題)実熙卿叙從二位同四年正月六日廿位記賞起(題)实熙卿、叙從二位、同四年正月廿日、实熙卿賜去永享二年

正月六日位記、此外猶存例候、

廿六日、晴、予所勞猶以同篇、散々式也、

廿七日、

廿八日、晴、及夕雨下、珍重々々、予歛樂未得減間、為祈祷廬山寺僧衆

六人被入來、大般若転読也、慈母以下御聽聞、予於仏前祈念、成就勿

論々々、此間被入來瑞雲院七今日被祈祷、

廿九日、晴、所勞同体、可謂珍事、